「オウカティッビ、又の名チョクトー族のサムソン」

ウィリアム・ギルモア・シムズ 作

中村 正廣 訳

一八二十何年、私は初めて大南西部の盆地を旅した。[1]「遍歴癖」[2]に相当影響されたこともあり、私は勢いチョクトー部族連合[3]のところへ足を向けざるを得なくなったが、当時この部族はトムベクビ川[4]とミシシッピ川の間に挟まれたテネシーとの州境の南の土地の大部分を占有し、その土地の南端は、現在のミシシッピ州の州都であり当時ジャクソンの町と呼ばれていた町の辺りまで延びていた。この地方とその周辺を数週間かけて彷徨い歩いた私は、時間を空費した感じも時間にせかされた感じも覚えることはなかった。ただ、読者の皆さんは当時の旅が非常に簡単なものであり現在の心地よい交通手段や設備の多くを使えたとお思いになるかもしれないが、それは間違いである。全く正反対であった。当時旅は厄介な代物であった。旅（トラヴェル）というよりは労苦（トラヴェイル）であった。道路は少なく、見つけるのは至難の業であった。ジャクソン将軍[5]が企画しテネシーからポンチャートレーン湖[6]まで延びていた大きな軍用道路（オ・コントレール）という唯一の例外を除けば、インディアンの小道ぐらいしか

「部族連合」に知られている幹線はなかった。そして、ただ名ばかりに文明化されているだけの散在した近隣の開拓地もほぼ同じ状態にあった。私の体験から言えば、このインディアンの小道の中には土地に不案内の者を右往左往させるために作られたのではないかと思わせるものもあった。「どこに行くのかわからぬ」グレイ[7]の詩の廊下と同じく、絶えずこの道は私を立ち往生させた。時に沼地に飲み込まれてしまうこともあり、そのようなときはこれから先地上をどう進むかは頭上の空を慎重に注意深く調べるという方法で見つけるしかなかった。頭上の木々の隙間だけがこれから取るべき進路を教えてくれた。このような前進は、蒙を開くことはあっても楽しい旅ではないことは容易に想像できようが、とは言え幾つかの点で魅力に事欠くこともなかったのである。若かやかな烈々たる意気を持った者にとって、この種の障害は意気消沈させるというより興奮させる傾向がある。時には障害物自体に画趣に富むものが含まれており、それは常に人間の徳性を発揮させるものだ。新しい地方特有の言い回しを使えば「不便に耐え忍ぶことを学ぶこと」となる。それは教育的な表現であり、あらゆる国の若者を治める規則として採用されれば大いに役立つと思われる。新米には不可思議な進み方かもしれない。しかし、「かじりつくようにして丸太を渡り」[8]、川を泳いで渡り、あるルートが妥当であるか、別の道が妥当であるかをあてずっぽうにやってみる、またインディアン流にインディアンと話してみる――文明社会がめったに提供することのない他の数多のことは言うまでもない――そうすれば、楽天的な気質の若者はアメリカのフロンティア地方の探検の旅に伴う苛立ちよりも更に深刻な多くの苛立ちの種を甘んじて受け入れるようになるだろう。

十一月のある曇った日の暮れ方、私はハリス大佐[9]の新しいが粗末な作りの大農園開拓

地から呼べば聞こえるところまでやって来た。「母胎となった十三植民地」の一つからミシシッピに最近になって事業を移したばかりで、チョクトー部族連合のすぐ近隣の広大な土地を買い取り、さらに先住民から買収することで部族連合内の特別地域も幾つか手に入れており、今日彼が所有していると評判の莫大な財産は主にこの土地のお陰であった。現在の彼の家屋敷に光彩を添えている豪壮な邸宅はまだなく、当時はその地方のどこにでも見受けられたみすぼらしい丸太小屋が一軒あるだけで、そこに彼は単身で仮の住まいを構えていた。大佐の農園は自然の支配をかろうじて免れていた。初めての農作物のために前年の冬に木々の樹皮を輪状に切り取ったばかりで、作物はそのときまだ穫り入れは行われておらず、その未熟な状態の農場にしては豊作であった。冬の曇った日に、広大な森の真っ直中で、それも人間の姿や住まいを全く目にしないまま何マイルも旅してきた後でこのような開拓地を見るとなれば、その憂鬱な様相は言葉では表しようがない。ジグザグ形の柵自体陰気な光景であり、それに直立しているが枯れてしまっている輪状の切り込みの入った木々、つまりつい最近まで生きていた生命体の死にかけた骸骨を目にすれば心が激しく揺さぶられるが、それは人間と馬の朽ちかけた死体の片づけがまだ済んでいない戦場を検分するときの気分とは完全に違うと必ずしも言い切れないのである。ハリス大佐の柵は長く延びてはいたが背は低かった。牛が無差別攻撃して来ぬよう田畑を守るだけのものであった。彼の離れ家の中で大きさと堅固さと安全性の点でそれなりに一番しっかりしているのはトウモロコシの貯蓄小屋であった。黒人小屋は大佐が住んでいる丸太小屋と同じように仮住まいの掘っ立て小屋にすぎず、棒で覆われ、樹皮と乾いた松の葉で葺いてある。一

言で言えば、私の目に入るものすべてが、快い暖炉と気持ちよく取り揃えられた肉体的快楽を増す食べ物を期待する私の気持ちをさらに鬱々とさせるばかりであった。しかし歓迎を受けるやたちまち私の疑念と不安はすべて消えた。準備不足を全く意識していないような、そして嘘偽りのないもてなしさえあれば矯正できないものなど何もないと決めてかかっている、あの打ち解けた、心のこもった歓迎を私は受けたのである。足りぬものがあることなどまもなく忘れてしまい、すぐに私はくつろいだ気分になった。私はハリス大佐宛の手紙を何通か所持しており、このために特に歓待を受けたのだが、十分もすると、私たち二人は日常会話の浅瀬と深海の中を総帆揚げて突進したのであった。

これに話を限定したというわけではない。暫くして、大佐の農場を馬に乗って通り抜けるとき、そして彼の住まいに近づいていたときにも私がはっきり目にしたひとつの事件に私たちの話題は移っていったが、私はそれにかなりの驚きを覚え、私がそれまで抱いてきた先入観はそれによって幾分かき乱されていたのである。男女混成の、しかし大半は若者たちからなるかなりの数のインディアンが、黒人労働者に混じって皆一様にせわしく綿摘みしている現場を私は目にしていた。最盛期が長引いており、そのため大量の綿の丸いさやの成熟に好適な状況にあったが、寒さの厳しい初冬が到来しておれば壊滅していたに違いなかった。お陰で作物は刈り入れ収穫する「労働者」の能力を越えるほどの豊作となっていた。これは南西部の新しい肥沃な流域では決して珍しいことではない。豊作となれば、普通なら生産性の低い地方から他の黒人を買い入れ自前の「労働者」の労働の収益をしっかりと懐に入れるのが土地の習わしである。さらに両方の労働者を一緒にして次の土地の

開墾にあてるのだが、その土地が以前と同じように豊作となれば、頃合いを見計らって労働者の勤勉の余剰的成果を確保し収穫するために再びさらなる労働者の買い入れの必要に迫られる。一見必要に見えるこの事態が将来再び起こると予想されれば、労働者の購入をあっさり決めてしまうのが農園主であって、このように事業を拡大し続けることで土地の面積を増やし、土地と法外な値段で買い取った奴隷のために借金を抱え込んでしまっているのだが、ところがそれが生み出す商品は一袋増えるたびに商品価値を落とすことになり、利益の算定からすればそれを生産する勤勉の生産力を下げているのである。西部における冒険的事業の放蕩ぶりの例としてこの事実を心に留めておけば、世界で最も肥沃な自然のままの地方を所有する国民が支払い不能で絶望的状態に陥っている理由を幾分納得できる形で説明するのも難しくはないだろう。

ハリス大佐の作物はこのような類のものであった。彼の「労働者」だけでは到底刈り入れることなど無理な作物だった。ところが、この目的のために特別に余分の奴隷を買い入れたりせずに、彼は周辺の怠け者のチョクトー族をうまく利用することを考えたのである。彼はそこそこの報酬、しかも週給の支払いで雇い入れる条件を彼らに提示した。この利得の誘惑に腹をすかした浮浪者たちは貪欲に飛びつき、まもなく数ドル、もしくはそれに相当する品物や食料雑貨類などを手に入れるため、約四十五人のインディアンが慣れない労働に懸命に従事している姿が見られるようになった。それは軽易な仕事で、これ以上楽な仕事はないというようなものであった。やがて、インディアンの女たちは、黒人のように手慣れたところまでは行かなくとも一日で袋や篭を何とか一杯にすることができるように

なった。暮れ方、地主が待ち受けている丸太小屋に彼女たちが荷物を背負ってとぼとぼと歩く姿が見られた。ここで彼は彼女たちの荷を計り、彼女たちが持ち込んだ重量に応じて毎晩掛け売りを認めた。私が到着した夜は土曜であり、丸一週間の労働の賃金を合計し支出報告することになっていた。彼らが皆時間通りにそこに集まったのもまさにこれが目的であり、ハリス大佐がメモ帳を取り出して記帳を始めたときに彼ら一人一人が見せた関心は実に興味深いものであった。どの目も彼に向けられ、一人のインディアンの老人などは、自分は働きもせず妻と二人の強壮な身体の娘の利益を代表して紳士のすぐ後ろに陣取り、才知にたけた表情をますます強く顔に見せながら、大きな本に書き込まれる一筆一筆を見守っていたが、彼にとってはそれはエジプトの神秘や象形文字以上のものであった。一方、インディアンの女たちは同じような関心を顔に浮かべて自分の籠の周りに立っていたが、同時にその顔は賞賛に値する忍耐力を見せていた。後ろに立っている黒人たちは正式の訓練を受けていない野蛮人よりも肉体的にも知的にもほとんどあらゆる点で自分たちの方が勝っていると感じており、軽蔑しながら歯をむき出して笑っているのがほとんどどの顔にも窺えたが、好奇心をかき立てられたという点では彼らもほとんど変わらなかった。職を持つことも求めることもないインディアンがそこには大勢いた。雇われた者に中高年のインディアンはほとんどいなかった。しかしこの連中もこの集まりに顔を出さぬということはなかった。他の連中の間をうろついては妻や息子や娘の労働の産物を抜け目なく見張っていたが、その関心たるや、木の梢や岩に止まっている鷲がじっとミサゴを見つめ、ミサゴが水の外へ出てきたところをその口から獲物をもぎ取ってやろうとミサゴが獲物を求め

て水に飛び込むのを待っている鷲が抱くような類のものであった。彼らの関心が哀れな労働者のそれより大きいことは誰の目にも明らかだった。こうしてこれらの禿鷲たちは労働者の勤勉の成果を着服するのだが、これを治す薬などどこにもなかった。雇い人に支払われるべき金額が発表されるとすぐに割って入り、数ガロンのウィスキーや数ポンドの煙草や数ポンドの火薬と鉛の弾丸に給料を溶解させるのが彼らがいつも決まって使う手であった。ハリス大佐の場合のようにもし雇い主がウィスキーの現物支給を拒めば、金で支払うよう彼らは要求した。これを持って彼らはすぐさま飲み屋と呼ばれている悪の掃き溜めに向かうのである。イギリス文明が最も馴染みのある堂々とした旗として野蛮人の丘や森にいの一番に立てたがるものが実はこれなのだ。

インディアンの剛毅な性格と気質に対するこの実験――というのも、それはほんの一週間試みに行われただけの実験であった――が私にとってもかなり好奇心をくすぐる話題であったことは理解してもらえると思うが、この急速に堕落しつつある民族の特色と化してしまった屈辱的な道徳的社会的退化を強く感じている人間ならまず全員が間違いなくそう感じただろう。一体この実験が成功するということがありうるだろうか。自尊心が強く、無愛想で、無口で、放浪する民族が、たとえ歩一歩であれ、そして確かな埋め合わせの見込みがあったとしても、その気まぐれで拘束を知らぬ生活様式を放棄せよという説得を聞き入れることなどありうるだろうか。重労働を要しなくとも、少なくとも労を惜しまぬ不変の勤勉さと日々繰り返される労働に精励する習慣、つまり彼らの流浪の性からすれば人生を誠に単調で魅力に欠ける所有物と思わせてしまうような習慣を要求する仕事に、暫し

の間であれ彼らをうまく騙して就かせることができるであろうか。たとえ楽な労働と単純な勤務とそれに見合う報酬といっても、その様々な仕事にどこまで素直に従うだろうかというのが当然私が尋ねたい問題であった。この点に関して私の友人ハリス大佐は私と同様ただ推測し憶測するしかなかった。彼の実験は始まってまだ数日しか経っていなかった。しかし私たちの推測は非常に異なった結論を導き出したのである。大佐は情熱家で、自分の計画の成功について至極楽観的であった。インディアンは現段階でも思慮深い文明の影響下に置くことができるということに彼は疑いを挟むことはなかった。まず第一の過程は彼らに労働させることにあるということ、そしてこれは準備的な措置でありこれを避けて前に進むことなどできないという点では私たちは二人とも同意見であったが、いかにしてそうさせるかということが問題であった。

「説き伏せてやらせればいいんじゃ」というのが彼の結論であった。「一般民衆の神像とも言うべき金銭なら、わしらを動かす力を連中にも発揮するはずじゃ。彼らは金のためなら何でもやるにきまっておる。今農場で働いている連中を見てみるがいい。この前の月曜からここにおるし、相変わらず仕事に精を出してもおる、頭数も減ってはおらん」

「これから先どのくらいの間ここでそうやっているでしょうか」

「わしが連中を雇って賃金を払える間は大丈夫じゃ」

「ありえませんね。あっという間に不満が出てきますよ。男たちが女や力の弱い者たちの稼ぎをすべて使い果たし浪費するに決まっている。あなたがおっしゃる彼らの勤勉の動機である金そのものが、初回の給与の支払いの後彼らから消えてしまうはずです。道徳的

な思慮分別の初歩をいまだに知らぬ野蛮な民族に労働の習慣を身につけさせるには、強制というただ一つの手立てしかありません」

「そのうちわかる。わしは今強制は何ひとつやっておらんが、連中は驚くほどきちんと働いておる」

「それも今週で終わりです。野蛮人というのは肉体的側面を除けばあらゆる点で子供ですよ。彼らをどうにかしようと思えば責任ある地位に置いて法というものを教える必要があります。だってこれがなければ子供を教育しようとするいかなる試みも不条理になることは明らかですし、ともかく彼らに従順というものを教え込む必要があります。まず手始めに、彼らが何も知らぬということ、優れた者に無条件に従わねばならぬことを教えてやる必要があります。上官の管理監督からすぐに撤退する力を所有している限り、彼らがこの教訓を学ぶことは絶対にありません」

「しかし、万一それが許されたとしても限度というものがあるはずじゃ。連中を解放しなくてはならぬときがやって来るからの。どのような状況になればそのときが来たと君は言うのかね。君の言う強制の状態に連中をずっと置いておくことなどできんぞ。いつ自由にするんじゃ」

「自由を与えるのに適しているときですよ」

「それはどうやって決めるんじゃ。適していると一体誰が決めるんじゃ」

「本人たちです、ちょうどイスラエルの子孫たちがそうしたようにね。モーゼのような指導者を、つまり自分たちを教育した民族の才能と比べて引けをとらず、解放後の適切な

自治の才能を十分に持った人物を、イスラエルの子孫たちは知性の向上によって彼らの集団から輩出できるようになるとすぐに奴隷の身から抜け出したのです」

「しかし、このような実験は我が国でもう行われたことがあるじゃろう」

「いいえ、ないと思いますよ。そのような実験など私はひとつも耳にしたことはないですね」

「それがあるんじゃ。一人のインディアンの少年が両親のもとから幼年期に引き離され、北部州の一つに連れて行かれ、北部の大学と社会の学問と習慣を仕込まれ、白人とだけ交際し、キリスト教社会に知られたもの以外の風俗を目にすることもそれ以外の道徳を耳にすることもなかった。学問の進みも申し分なく、なにしろ物覚えが速かったから、ちょっとした天才だと考えられ、素晴らしい成績で卒業した。それから他の者が持っていたのと同じ選択の自由を与えられ、専門職の選択を任された。さてこの少年の選択は何だったと思う。この話題に関するフレノー[10]の美しい小詩を君は覚えていないのかね。少年は鹿革の脚絆とモカシンと弓矢と仲間が暮らしていた広大な野生の森を選択したんじゃ」

「事の経緯はフレノーの詩とはちょっと違います。しかし、あの詩のもとになった事実はあなたがおっしゃる通りだと思います。しかしそれは何とひどい実験だったことか。何と馬鹿げた実験だったことか。銅色の少年を仲間から引き離し、まだ幼児の頃に遠く離れた地方へ連れ去ったのですからね。この実験を適正に行うために出自に関するあらゆる情報を少年に与えないでおくと仮定してみましょう。少年は周りの他の若者と全く同じように育てられます。しかし、彼がまず第一に発見することは何でしょう。自分が銅色の少年

であり、自分だけが銅色の少年で、どこを向いても自分と似た者はいないという事実なのです。これが彼に驚嘆の念を引き起こし、次に好奇心を、ついには疑いを生じさせるのです。少年はすぐに自分が実験の対象であることを知ることになります、だって疑うことであらゆる観察能力が研ぎすまされていきますから。そうです、この世で最も慎重な策を弄しても明敏な考えをもった腕白坊主からこの事実を隠し通すことなどできませんよ。仲間の生徒が彼に教えますからね。彼らにとって自分が好奇心と研究の対象であるということを少年は知ることになります。仲間は彼を、そして暫くすると彼自身が彼を、特別扱いされ幾つかの特殊な目的のために他のすべての人間から切り離された存在として見るのです。このようにして自分の個性と孤独を意識する耐え難い異常な感覚が彼に押しつけられていきます。彼は自分に問いかけます、俺は本当に一人なんだろうか、俺は誰だ、俺は何者だと。これらの疑問は当然他の疑問を生み出していきます。だって彼は本を読むでしょうから。書物から彼は自分の民族の歴史を知ることになります。それどころか間違いなく自分の話を新聞で目にするでしょう。サスケハナ川の人里離れた源流に暮らす部族国家の出であることを知るようになります。彼は情報を求めてくまなくかぎ回ります。人知れず探せば探すほど、詮索には熱が入ります。それは彼の心を激しく掴んで放しません。自分の部族が残忍な戦士であり名を馳せた猟師たちであることを知るようになります。白人との争いを、つまり、部族国家が無数の弓の射手を送り出すことができ白人たちが数が少なく弱かった頃の戦いの勝利について耳にします。周りの白肌の若者たちが今でも敵として、いや少なくとも疑いの対象として、ひょっとしたら虫の好かないものとして彼の部族のこと

を口にすることだってあるのです。結果的に以上のことが彼の心の中で作用して部族の歴史を高尚で理想のものに変えていくのです。自分は滅び行く民族から『一本の枝のように樹液を流しながらほうり投げられ引き裂かれたのだ』[11]と感じる彼は、心に自然に生じる欲求を越えることすらあるような共感を覚えるようになります。自分の祖先を、自分の部族や国の人々を見てみたいという好奇心は、同じような状況下に置かれれば白人の少年でもごく自然に抱く感情ですからね。肌の色のために他者との関係が持てずにいるインディアンの胸中をこの強い感情が支配しても驚くことはありません。この実験について、もしこのようなやり方が実験と呼べるものならばの話ですが、それについて私の見解を今ここで申し述べることは簡単です。事実をありのままに申し立てたものであって、驚くことなんかひとつもないと私は思います。あの結果ほど自然なものはありませんでしたし、人並みの思考力のある人間ならば、まさしくあのような事態になることを簡単に予測できたはずです。ただひとつ不思議でならないのは、普通の教育を受け普通の知恵を身につけた人々の中に、あのような実験に取りかかり自分たちは道徳的哲学的問題にいそしんでいると思い込んだ人間たちがいたということですよ」

「じゃ君ならあの実験をどういう風にやったと言うのかね」

「ヘブライ人に対して、サクソン人に対して、これまで文明化したあらゆる野蛮な民族に対してなされたやり方を使います。この実験は個人に対して行ってはいけません。一国家に対して、いや少なくとも外部からの援助の見込みが全くなくなった共同体に対してなされるべきものです。同情を求めて視線を向ける森や外国の地を持たず、いかなる逃亡の

手段も希望も持たず、既に文明化した民族の完全なる支配下にあって厳しさに耐えていくための同情を自分たちの中に見い出せるだけ数がそろっている共同体になされるべきで、この必要不可欠な厳しさも最初は強圧的に見えるかもしれませんが、改善改良という大仕事を行うにはこれしか希望の持てる手立てはないでしょう。顔つき、容姿、顔立ち、気質が自分たちと同じで同じ異常な制限の下にある他の者たちを目にすることによってこの同情を見つける必要があります。このように他の者を見つめることができれば、自分たちの手で押しのけることのできない拘束の下で労働を続けていくことに不満を覚えることはないはずです。しかし自然の理法は満足させる必要があります。正当な情欲に耽る機会は与えられなければなりません。服従させられた民族の若者は男女とも、自然の要求通りに、そしてその民族の習慣に従って互いに心を通わせ縁を結ぶ必要があります。例の『実験』が試されたあのインディアンの学生が白人の乙女に言い寄っていたらどうなったでしょうか。この結婚の申し込みを耳にしたサクソン人の少女は胸中で道徳心と社会的意識がそれに激しく反抗するのを感じたはずです。もしも少女が申し込みに同意するようなことがあったら、彼女が暮らす共同体では大変な騒動が持ち上がっていたでしょう。しかしこの反感と騒動は至極自然なもの、従って至極適切なものであったでしょう。だって神は幾つかの特定の人種の間にはっきりとした区別をおつけになり、現実にそれを別々になさり、そのような分離が保たれることを要求しておられますから、私たちが所有している最も油断なく見張っている感覚のひとつである目は抵抗し咎めるようにできているのです。この感覚が主張するさまざまな偏見は自然界の境界を維持することを要求しますから、隷属して

いる人種は別個の共同体を組織してその大きな目標を遂行するのに十分な頭数をそろえることが是非とも必要となります。恐らくその共同体は劣ったものになるかもしれませんが。時が経つにつれ、労働が与える有益で恵みのある効果をその人種の中で最も無知で野蛮な人間ですら感じ理解することがあるかもしれない。多分『私の律法を守る者たち』[12]から一世代か二世代でそうなることはないでしょうが、第五世代か第七世代の後ならあり得ます。まもなく彼らにもわかるはずです、骨折って働かざるを得ないけれども、その労役は彼らの体力を弱めることも彼らの幸せを害することもないということ、それどころか労役は常に体力と健康と慰安の増幅を生じせしめること、気まぐれな季節や頼りにならない狩猟のために以前は不安定であった彼らの食料が今や有り余るほどにあり、しかも健康によく安定しているということがわかるはずです。それからまた、あらゆる遊牧民族に大抵ついて回る運命であり彼らが滅び去る過程の一つである生殖力の脆弱に代わって、多産の力が驚くほど増大していることに彼らは気づくはずです。これを知ることによって、勿論その時間があればの話ですが、彼らは自分の人種が今置かれている低い地位を暗黙のうちに甘んじて受け入れるようになるでしょうし、この地位について申し添えておきますと、それは彼らの知的劣等が続く限り当然ですし避けられないものです。彼らの頭皮を一枚につき五ポンドから五十ポンドといった様々な値段で買い取ったりせずに、私たちが彼らを征服し支配下に置いていたら、インディアンが受けた影響はいかばかりのものになっていたか、だって彼らはこれまで世界に例を見ないほどの高貴な原住民であることは誰の目にも明らかですから。私たちの優れた文明の精神で制限されその労役を押しつけられても彼ら

の数は増えなかっただろうとか、もしそうなっていたとしても彼らが今この国の国力と国民性の形成において非常に貴重で見事な一翼を担うこともなかっただろうと、はっきり言い切れる者があるでしょうか。恐らく彼らの文明化は割合簡単だったと思います。ヘブライ人は四百年を要し、ノルマン征服後のブリトン人やサクソン人は確かその半分はかかったはずです。彼らはジュリアス・シーザー統治下のローマの侵略が行われたときの古代ブリトン人よりも優れた天性の素質を持っていると思いますが、征服者と肌の色が異なっており、この二つの人種の争いはもっと時間がかかったはずです。しかし結局は結合が生じていたでしょうから、そのときには、イギリス人の場合と同じように、精神的にも肉体的にも世界と互角に渡り合える一つの人種を子孫に持ち得たはずです」

「その通りじゃ、しかし困難は征服することにあっただろう」

「確かにそれが困難な点だったでしょう。アメリカの入植者は数も少なく方策も脆弱なものでしかなかった。彼らの母国は彼らを送り出すとき力を全く奮うことはなかったのですから。備えがあれほど不適切な植民地は初めてでしたし、あれほど完全に放置された植民地はなかった。だからこそイギリス軍が後に植民地側に途方もない課税を求めイギリスの勢力拡大とその出費を支持するよう要求したとき、その強制取り立てがいかに不当で横暴であったかが証明できるわけです。初期の入植者が強大な力を持っていたら、大陸で遭遇する野蛮人の放浪集団相手に土地交渉などわざわざやっていたでしょうか。絶対にないですね。彼らが結んだ取引きや条約は土地ではなく野蛮人の寛大さを求めてのものでした。彼らは妨害を受けずに居残る許可を買い取ったのです。表面上土地のために拠出されたお

金は彼らを上回るインディアンの力に対して支払われた貢ぎ物にすぎず、それはちょうどアルジェとイスラム教徒を征服して敬服させるほどの力を持つに至るまでは貢ぎ物を払っていたのと同じことです。数隻の船に乗り込み、数百人規模の人数でマンハッタンやペノブスコット[13]やオクラコック[14]の海岸に恐る恐る近寄るといったことはせずに、イーニーアス[15]のような名を馳せた指導者が自分の民族を皆引き連れて来ておれば、例えば迫害されたアイルランド人でもいいですけれども、とにかくそうしておれば、目を疑うような違った結果が生じていたはずです。インディアンは隷属させられ、彼らにぴったりの慎ましくて人に寄りすがる身に零落していたでしょう。そして今頃は征服者と合体して一つになり、精神的肉体的発達においてこれまで歴史に例を見ない、最も高貴な人種をアレゲニー山脈の大きな尾根沿いに生み出していたはずです。白人たちの恐怖心と脆弱さのためにインディアンは傲慢になるようしつけられたのです。お世辞や立派な贈り物や溢れんばかりの敬意のために得意になってしまい、最後には、獣と比べてほんの少しだけ上のこの無知な野蛮人は、それまでせいぜいその日のポリッジ[16]を確実に手に入れることしかできなかったこの野蛮人がですよ、お高くとまり、全世界の中で最もうぬぼれた横柄な君主の一人と化したわけです。入植者たちは力をつけるにしたがって賢明になったものの、弊害は既になされたわけですから、昔愚かにも蒔かれた種の苦い実を今日刈り取っているというわけです。いずれこの実験が適切に行われるのを私たちは目の当たりにすることでしょう」

「ほう、一体そこはどこじゃ」

「メキシコですよ、テキサス人の手によってです。現在メキシコの土地を占有しその国

運を破壊しているあの自惚れの強い無知な卑劣漢たちが、こちらの頑強な冒険家たちとどうしても戦をするというんならやらせればいいんですよ、どうせ連中の運命は決まっているわけですから。残念ながら剣を使うことになるかもしれません。それよりはまだましな束縛と屈従という運命がやってくればいいと私は願ってはいますがね。そのような運命の方が連中の救いになるでしょうし、これまで連中が享受してきた生活よりはずっといい状態へ連中を引き上げてくれるはずです。三万のテキサス人が、皆馬にまたがり銃をもって押し寄せれば、すぐにモンテスマ[17]の町を支配できるでしょうし、そうなれば例の実験が実験と呼ぶにふさわしい大きな規模で行われるのを目の当たりにすることになるかもしれません。でも、あなたがおっしゃるあの学生は、『ススケハナの最も奥の源』[18]から連れ去られケンブリッジに送られたわけですが、スターンが描いてみせたあの囚人の精神状態[19]のようなものを提供してくれるだけです。来る日も来る日も彼がやることと言えば主に日々の苦しみを終始記録するためにそれを棒きれに刻みつけることぐらいです。彼にとってそれは拷問づけの実験で、スコットランドの鉄靴やスペインの親指締め、あるいは筋肉と関節と腱に不快感を加えることによって精神に心地よい節義を銘記させるあの古代に行われた巧妙な仕掛けとほとんど変わらない拷問だったはずです。精神の分析に精通したアメリカの作家が誰かこのフレノーの詩を物語の題材にしてくれるといいんですけどね。実に見事な素材となったと思いますよ。自分の民族や他の民族に関する知識がいまだなく互いの違いを論じたり比較したりすることのないインディアンの少年が、自分の部族から引き離されたときの思いと感情を詳しく説明するためには、例えばプリンストンとかケンブ

リッジといった大学まで彼の後を追いかけてみればいいのです。大学の中にいる彼は群衆の中にいながらその一員ではなく、ノルマン系英国人の闊達で抜け目ない若者たちに囲まれながら、他の者たちが彼のことを穿鑿したりその素振りを見せているのに自分の中を見つめるだけの彼は、彼の出自である野性的で無知な部族について彼らが理不尽で思いやりのない長話をするのを聞いて、のべつ幕なしに心の中で発作が起きるのを覚えるのです。聞いている風はなくとも少年たちの未熟な思索に耳を傾けているわけですが、彼らの思索の対象である大きな問題を解決するには、いかにして自分の発作に巧く耐えるか、もし苦難を切り抜けることがあるならば自分の人生哲学をどう使っていくかを考えるしかないのです。やがて、労苦に満ちた勉学が、そして祈りと暗唱という退屈な束縛と苦難が乗り越えられたとき、この哀れな少年の苦しみを逐一目撃してきた部屋から解放された彼が喜び勇んで自分の足枷を投げ捨てる姿を私たちは見ることになり、描写することになるのです。とてもありそうにないことなのに、彼の学習課程が終了したと宣言されるまで彼がそこにとどまると思って彼は解放されるわけです。彼が最初の深い森のすぐ近くで立ち止まり、自分の手足から彼を彼の部族の者とは異質のものに見せている服をはぎ取るとき、彼の心には実に奇妙な喜びが溢れるはずです。彼の部族の戦士の長と同じ格好で毛布のローブを両肩にあてようとするとき、彼の心臓は高鳴るに違いないのです。自分の部族についての予備知識が少しでもあったならばの話ですが、無理矢理目を背けるように強要された自分の親の一族の特色であった慣習や特性をごくわずかなものでも全て取り戻すために、彼は格段の努力を払って記憶を無理矢理呼び覚ますはずです。夕方生まれ故郷の小村に入り、

会議所の入り口に黙って座りながら一言も言わず長老たちの呼び出しを待つとき、彼は一族の屈服を知らぬ誇りと一族の尊大で平然とした傲慢な表情と仕草をそっくりそのまま真似るはずです」

「色鮮やかに描いてくれたものじゃ。信頼できる人間の手にかかればそういう主題は実に崇高なものになるという君の話には賛成じゃ」

「でも話はここで終わりということにはなりません。これまで聞かされてきたような形ですべてが起こったと、つまり、この少年が大学を卒業し、栄誉を投げ捨て、今述べたように野蛮な服装に、自分の部族の故郷と習慣に戻ったと仮定してみましょう。しかし、彼が優れた人種の教育から得たと思われる英知を、事実に関する知をすべて投げ捨てるだろうと決めてかかることはできません。いかなる教育の影響も受けることのない生まれ持った本能には従わざるを得ませんが、しかしそれが終わり、社会教育という当面の目的の達成を妨害した彼の血の最初の激情が収まったとき、次第に彼の心の中で教育の影響力が復活し、知的習性が新たに力を奮い始めます。目に入る周囲のものすべてが彼の知的習慣を必ず刺激し、そのためにこの知的習慣は動き出します。少し距離を置いて見たとき、それまで禁欲的な英雄的資質と最も高潔な誇りとしか見えなかった猟師的生活の惨めさがどのようなものか、その真実の様相に気づくようになっていきます。自分の部族のむさ苦しい貧乏暮らしを目の当たりにして彼は嘆くはずです。貧乏は部族の生活様式と日々の仕事のせいだということに、彼は最初に受けた文明の教育のお陰で気づいたはずですからね。ぐでんぐでんに酔っぱらった部族の姿は彼の美的感覚に不快感を与えるでしょうし、彼らの迷信や無知は、これは鳥や猛獣の生活のことを除くと物事や関係を判断する能力が制約さ

れているという意味ですが、彼らと同族であると感じる彼の中に羞恥心を呼び覚ますことになります。部族が持つ自由が持つ不安定さに彼は恐怖心を覚えるはずです、だってどこの原住民国家であってもその大多数の者は世界中で一番ひどい奴隷だということをたちまち知ることになりますからね。不潔で酒に溺れた生活の中で部族が見せる品位を落とすような振る舞いの数々は、人間が追いかけ鞭打つ最も野蛮な獣ですら見せることのない嫌悪すべき姿に人間を貶めるものですから、これを見たインディアンの学生は、大きな屈辱と苦痛を感じながら白人の賢者たちに囲まれて修練を積む身であった頃目の当たりにしたものとは著しく違っていると思うはずです。彼の記憶は融和の気持ちを込めてその時代へ戻っていきます。苦痛は終わりを告げているわけですから、男らしい不撓不屈の精神でもって耐えた過去の苦しみの記憶は少し喜びを与えてくれます。彼の心に必然的な反動が起こります。自然の法則に従って次に何が起こるか、起こると思われるかと言いますと、それは彼が部族の教師となり改革者となることを目指すということでしょう。部族の者も彼を暗黙のうちにその地位に引き立てるはずです、なにしろ森の人間は白人に教育されたことのある黒人にすら敬意を表するでしょうから。彼は彼らにもっと几帳面で勤勉な習慣を教え込もうとする。彼らの邪神の祭壇を取り壊し、放浪する幾つかの部族を一人の長、一つの国家の下に束ねる努力もするでしょうし、一定不変の統治法律を定めることもやるでしょう。成功することもあれば失敗することもあります。自惚れの強い者や頑迷な者の誇りを傷つけることもあるでしょうし、聖職者が最初に反対を唱えるかもしれない。ロミュラス[20]の場合と同じように、十中八九彼は殺害され、その後に神格化されるでしょうし、もしこの運命を免れることができても、恐らく失敗が無念で倒れることになるでしょう。ま

た、野生の環境に付随する感情とキリスト教思想から生じた感情のどちらに忠誠を尽くすべきか迷ってしまい、つまり、片や文明を獲得していながら、片や血筋を引いた本能的衝動によって劣等人種との繋がりを鮮明に見せる彼の中でこの二つの力が当然のごとく衝突してしまい、そこから生じる精神的葛藤の結果死ぬかもしれない。度重なる予期せぬ挫折がやがて若い頃の血気の熱を冷ましてしまうと、このような葛藤に苦しむ彼はよろめき、ついには活力を失ってしまうでしょう。しかし彼の部族にとってすべてが無駄に終わるということがあるでしょうか。それは誰にも言えません。道端に落ちて無駄に終わる種はない[21]と私は信じています。たとえ真実が即座に実を結ばなくとも、もっといい頃合いのときに備えた道徳的な肥料となり不毛な心を肥沃にしてくれます。教員たちが失敗したように、インディアンの学生も自分が必死に目指して励んだ目標を実現できないかもしれません。ちょっとここで脇道にそれるのを許していただきたいですが、この種の失敗は人間の運命の中でも最もありふれたもののひとつですよ。人間の心が抱く欲望は、いつも人間に将来のために行動するよう命じる特別な神の摂理に促されて、自分の遂行能力をはるかに越えるものを狙うのが普通です。しかし合理的な目標のわずか一部分であってもそれを達成した努力というものが連綿と続く時代の中で無駄になったためしはありません。もしインディアンの学生が部族の者たちが以前知らなかった真実をひとつでも彼らに譲り渡すことができたならば、彼らの偽りの神々のひとりでも打ち倒すことができたならば、そしてまた、彼らの迷信的偏見のひとつでもいい、とにかくその蛇のような頭を打ち落とすことができたならば、白人が自分の世代のために普通やっていることをはるかに上回ることを仲間のためにやったことになります。彼らのとうもろこし畑にキビの畑を一枚付け加えた

ならば、道徳心の向上に向けて実際に彼らを一歩踏み出させたことになるのです。いえ、たとえ他の成果が全く得られなかったとしても、彼らは白人の学生（エレーヴ）である彼に敬意を払うはずですから、これはたとえゆっくりとしたものであっても、彼らが前と比べれば優れた人種の法と指導を自分から進んで受け入れる方向へ促すかなり重要な契機になると言えます」

第二章

読者の皆さんは畏友のハリス大佐と同様この長い議論に頭を悩まされるかもしれない。しかし今申し述べた見解がすべて上に記したような形で連続して語られたなどとお思いにならないでいただきたい。わかりやすくするために二時間ほど続いた会話を縮めて短く書き表しただけの話である。論争者によく見受けられることだが、会話が終わる頃には私たちの間にはほとんど本質的な違いがないことに私たちは二人とも気づいたということをここに付け加えてよい。私たちの話が論争だったとしてもそれは哲学的なものというより字句の上のものであった。しかし、実験という問題に関してハリス大佐は約四十人か五十人のインディアンの男女を雇うことで立派な実験の目的に見合うだけの数の一社会集団をかき集めたと思い込んでいた。それでも私は議論の論点は手つかずのままだと考えた。彼らは隷属しておらず、服従させられておらず、権威と理性を無視して自由で絶対的な意志を行使できた。彼らに服従を強いるための対策を彼は一つも講じることはできずにおり、放

浪という選択肢があればたとえ白人であってもどのような結果を招くかは誰の目にも明らかなのである。

「しかしですよ」私は言い立てた、「私が今お話したもろもろの反論があなたの計画を挫折させることにはならないにしても、あのようなかなり年輩のインディアンたちが未だにいるということはあなたの計画に不利に働く挫折の要因が他にもあるということになります。連中は労働に加わりもせず、それでいてあなたの実験の現状から判断しますと、未だに餌をあさり歩いては勤勉な者たちから骨折り仕事の成果をひったくろうと待ち構えているわけですから。今の事態の当然の成り行きからすれば、労働する者たちの勤勉に水を差すことになります。だって労働者というものは自分の労働の成果の相当な分け前をもらえないとなれば、それを長い間続けることなどできませんからね」

私たちの協議はインディアンと黒人の労働者が姿を見せたことで中断した。彼らはその日各自が摘み取った綿を背負って次々と入ってきた。綿は家の前の中庭に堆く積まれ、インディアンは男も女も自分の勤勉の証拠が入っている袋や籠の横に立っていた。先ほど私は一部分ながら私たちの対話と討論について述べたわけだが、この討論のために私がその場の成り行きに多大な関心を持ったということはすぐにわかっていただけると思う。居合わせた関係者はかなりの数であった。黒人たちはその光景を見て歯を見せて笑いながら後ろの辺りをうろうろしてしたが、ここで彼らのことを論じることはやめたい。その日綿摘みに従事したインディアンの男女の数は三十九人、うち二十六名が女性であったが、成人男性と言える者は三名のみ、他の十名は少年で、十六歳を越える少年は一人もいなかった。

女性のうち年輩の女性と少女の数はほとんど同数であった。男性群のうち一人はかなり歳を取って身体が弱っており、一人は中高年だが血の巡りがかなり悪いように見える。三人目は私がそれまで目にしてきた中で男らしい体つきの最も見事な見本と言ってもよく、私は周りの連中よりもこの人物により大きな敬意と関心を抱いて眺めた。上背はゆうに六フィートはあり、痩身だが隆々たる筋肉をしている。インディアンの顔によく見られるあのむっつりした疑い深い表情とはおよそかけ離れた、曇りのない、高潔で率直で寛大な容貌をしている。篤実と分別がこの人物の容貌の支配的特徴であり、彼はアングロサクソンの血統を受け継ぐ若者が見せるような陽気で勝手気ままな快活さを見せて笑ったり冗談を飛ばしたりしていたが、赤の他人のいるところでインディアンがこのような行動を見せることなどそうあることではない。これほど凛とした男らしさの見本とも言うべき人物が、部族の女性やひ弱な連中と一緒になって、戦士なら決まって軽蔑する卑しい労働をする身に成り下がってしまったのはどうしてなのか。

「彼は卓越した分別を持った男か臆病者かのどっちかですね。品位を下げたものです」

これが私の結論であった。ハリス大佐の答えがすかさず返ってきた。

「あれは分別のある男じゃ、臆病者なんかではない。わしが知っているチョクトー族の中では一番の人物のひとりじゃ」

「それなら部族の指導者となるべき人物というわけですね。猟師の間では品位を落とすものと考えられている仕事を自らすすんで引き受ける勇敢なインディアンがいるという事実は、分別と豊かな精神的柔軟性があるということの非常に珍しい証拠ですよ。あなたの

仕事が終わったらこの男と話をしたいですが、名前は何といいますか」

「本名はオウカティッビじゃが、わしらの間で一般的に使っている名前、つまり英語名はスリム・サムソン、22その剛力と細身のためについた呼び名じゃ。一般的に使われている後者の名前の方が部族の間でも完全に前者に取って代わり使われておる。ついでに言えば、たいていのインディアンが自分の部族の言語の名よりも白人が与えた名前を使いたがるのは、劣等の民族が優秀な民族に暗黙の敬意を払っていることの証じゃ。白人と親交を結べばすぐにあだ名を自分のものにしたがるのがインディアンなのじゃ。あだ名は賞賛の名とは限らんのに、価値のずっとある財産にしがみつくように連中はそれをしっかと掴んで放さんのじゃ」

このちょっとした会話は労働者たちが最初に到着した後に起こった騒ぎの間に小声で交わされたものであった。これ以上話を続ける機会はなかった。

他のインディアンたちについては特にこれといったところは全くなかった。八人か十人ほどの女とこれとほぼ同数の男たちがいたが、彼らは仲間のつらい労働には加わらず、それでいてその産物には仲間には負けない関心があるようだった。この連中は程度の差こそあれ、かなりの年輩者であることに私は気づいた。一人はゆうに八十も齢を重ねていながら、これほど高齢で威厳のある者にはとても考えられぬことだが、部族の中でも一番手がつけられない大酒飲みであった。綿摘み労働者が籠を手に持って前に進み出ると、この取り巻き連も近づいてきて、勤勉さにおいては張り合うつもりなど毛頭ないのに差し迫った勤勉の利益の収穫にすっかり夢中になっていた。しかし労働の利益といっても大抵はそこ

そこのものであった。黒人女性が一日百ポンド（バー・ダイエム）から二百ポンド相当の綿を摘むところを、インディアン女性は六十五ポンド集めるのがやっとであった。彼らの一般平均は四十五ポンドをはるかに上回ることはなかった。スリム・サムソンの籠の目方は他の者よりかなり多くて八十五ポンドあり、この一週間の彼の平均がこの量を大きく下回ることは一度もなかったとハリス大佐は私に明言した。

計量が始まって半時間が経過していたが、その間中断することも支障を来すこともなかった。ハリス大佐自ら細心の注意を払ってひとつひとつ籠を正確に計り、もっぱら今回の目的のために作った小さなメモ帳の綿摘み労働者の氏名の向かい側の欄に何人かの綿の重量を書き入れていた。男も女も実にすがすがしい好奇心を見せながら勘定となる記録を見守っており、その姿は見ていて滑稽であった。その一週間の全ての労働がその晩（土曜日）に精算されることになっていたため、ただ労働の成果を鷲掴みにするのが目的でここに集まった連中も珍しく姿を見せていたのである。

この禿げ鷹の群に一人の中高年のインディアンがいた。いかめしいむっつりした男で、堂々たる体格と強力の持ち主だが、その肌色からすると、いつもの横柄な性格をますます増長させ時折面倒を起こす元凶の酒をそのときもしっかり飲んでいる風であった。計量が行われている間にも彼はハリス大佐と雇い人の間に割って入り、この紳士をかなり苛立たせた。インディアンはその英語名をロブロリ・ジャック[23]といった。ロブロリ・ジャックにはその日姿を見せ人目を引く行動を取る三重の動機があった。労働者の中に彼の妻と二人の娘が混じっていたのである。計量の番になった三人の籠が前に出てくると、とても後

ろでじっとしていることができず、堂々と他の連中の前へ身を乗り出し、籠と手帳とさお秤を次々に手で触り、不正行為の疑いがあると言い、また事業経営者の一挙手一投足をじっくり調べさせろと言ってきかなかった。このようにして彼は大佐の職務の遂行を非常に困難なものにした。インディアンに対して公平を期すために申し添えておくと、彼の行為は彼らにとって腹立たしいものに見えたし、それはハリス大佐の思いと全く同じであった。妻は何度も彼を諭したが、それはインディアンの妻がその君主に対してよく使う言葉よりもどちらかと言えばもっと無遠慮な言葉であった。スリム・サムソンは二言三言チョクトー語で咎めた後、最後に平易な英語を使って「やくざな野郎」だと言った。周りの連中でこの闖入者を全く恐れていないのはこの人物だけのようだった。ロブロリ・ジャックが同じような言葉で言い返すと、スリム・サムソンはそこにあった幾つかの籠を一跳びで飛び越えて相手と立ち向かい、戦う素振りと真っ向から相手に挑戦する気迫を見せた。相手は決してこれを嫌っている風には見えなかった。彼は一歩後じさりしてナイフを抜いたが、これに対してスリム・サムソンは咄嗟に自分のナイフを構えた。このように二人は対峙し、これ以上激しい敵意を表に出すことはできないといった目で互いを睨め付けて動かなかった。もう一瞬遅ければ、両者から挑発の言葉がもう一言発せられておれば、殴り合いが始まっていたに違いない。しかし堅忍不抜の人ハリス大佐が二人の間に割って入り、家から彼の二連銃を持ってくるよう黒人の一人に大声で命じた。

「さて」彼は言った、「そこの二人に言っておくぞ、最初に手を出して殴りかかった奴から撃ち殺してやる。わしは嘘はつかんぞ。スリム・サムソン、自分の籠のところへ戻れ、

この件にちょっかいを出すな。ロブロリ・ジャックの勝手放題を許さぬ度胸がこのわしにないとでも思っておるのか。今に目にもの見せてやる」

決意を固めた白人がインディアンを服従させておくのは、両者がしらふであればそう難しいことではない。手短に言葉を付け足しただけで、正体もないほどに酔ってはいないロブロリ・ジャックは引き下がって静かにしておくほうが賢明だと悟り、そのような行動に出た。嵐は巻き起こったときとほとんど同じように突然静まり、ハリス大佐は再び自分の仕事を続けた。大変な厄介者であることが判明した例のインディアンは、幾分かは大胆不敵さが消えたとはいえ、それでもいらいらさせることを止めることはなかった。彼が最後に取ったやり方は、これから秤にかけられようとしている籠、つまり、彼の妻の籠にできるだけ近づき、棒切れの端を器用に小さな穴へ突っ込んで籠を下へ押さえつけ、こうして綿の重量を水増しし、妻がその日の綿摘みで優勝の栄誉に輝くように仕向けることであった。棒切れを使っているのを見ている者は一人もなく、しばらくは誰もそれを疑ったりはしなかった。この狡猾な男がもっと極端なことをやっていなかったならば、さお秤へのこの不正な試みは成功していたかもしれない。しかし、近づく度に重量測定への圧力の大きさは増し、皆がどうしてこのような小さな籠がこんなに重いのか不思議がっていたとき、スリム・サムソンがこの卑劣な手を見つけハリス大佐に教えた。大佐はすぐさまインディアンの手から棒切れを取り上げそれを相手の頭に浴びせようとした。しかし私はこれを諫めて止めさせた。少し遅れて計量は完了したが、私の友人は自分の実験について以前よりも幾分か疑問を抱くようになっていた。彼らの稼いだ勘定を払う段になって、彼はこの目

的のためにわずかばかり用意していた布やキャリコで払ったりもした。しかし大方はなまぐさ者や年輩者の悪影響のために支払いを金で要求し受け取ったのである。

第三章

その晩の十時頃だったと思う。夕食を終えたH大佐と私は先ほど二人が没頭した問題に再び取りかかっていた。しかし議論は活気を失い、いつしか二人とも見るからに就寝のための言い訳を喜んで受け入れてもよいという気持ちになりかけていた私たちの耳に、突然狂気じみた恐ろしい叫び声が聞こえ、うつらうつらしていた私たちははっと目を覚ました。私は直感的に何か恐ろしいことが起きたという確信を得て身震いを覚えた。何はともあれまず私たちは立ち上がりドアをさっと開けた。叫び声はもっとはっきりとした、つんざくような声になり、それが苦痛の呻き声であることは手に取るように分かった。それは死の叫びであり、心胆を寒からしめるような激昂した叫び声であった。多くの声が入り交じり、怒声もあれば怯えた声もあったが、多くは痛嘆の声であった。最後に幅をきかせ他の声が収まってからも長く続いたのは女たちの声であった。

「この騒ぎはあの商人の店からじゃ。チョクトー族の連中が酔って大立ち回りを演じておる、見下げた奴らじゃ。死人まで出ていることはまず間違いない」H大佐は声を張り上げた、「このような騒ぎは今回が初めてではない。前にも一度聞いたことがある。あの騒ぎは殺人が行われたことを告げておる。あれは流血を、ある犯罪が行われたことを表すため

にインディアンが上げる叫び声じゃ」

大佐がこう言い切ったところへスリム・サムソンが突然路上に姿を見せ、ドアのところにいた私たちと鉢合わせをすることとなった。H大佐がすぐに中に入るよう誘うと、彼はそれに従った。灯火の当たるところまで彼が完全に進み出たとき、私たちは彼がこれまで酒を飲んでいたことを初めて知った。酔いは収まり呆然としていると言ってもいいような状態に見えるが、彼の目が飲酒の事実を十分に物語っている。顔は穏やかというより憂いに沈んでいる。何も言わず暖炉に近づいた彼は炉辺の片隅に座り込んだ。その両手と狩猟用シャツが血で汚れていることに私は気づいた。彼の目は流血の印を同時に見やり、それから彼は不思議そうに片手の裏を返し、暖炉の火でそれをじっくり眺めた。

「大佐」彼はたどたどしい英語で言った、「俺、どうしようもない馬鹿」

「サムソン、一体どうしたんじゃ」

「俺、酔っぱらい、俺、喧嘩、俺、ロブロリ・ジャック殺した。見てくれ。俺の両手のこの血。これ、ロブロリ・ジャックの血。あいつ、死んだ。俺、あいつ、ナイフで刺した」

「まさか、お前が。どうしてそんなことになったんじゃ」

「俺、酔ってた。俺、どうしようもない馬鹿。酒屋でウィスキー飲んだ、金持ってて、ウィスキー買った、酔いやってきた、ロブロリ・ジャック死んだ」

これが彼の話の趣旨であり、暫くして両者の友人のインディアンが何人か姿を現したことがこの話の動かぬ証拠となった。これらのことから判断すると事の顛末は次のようであった。彼らは皆で白人のリゴンの店で酒を飲んでいたが、酒が入って興奮したロブロリ・

ジャックとスリム・サムソンは、H大佐がすかさず割って入って止めた例の喧嘩を相呼応するかのように再び始め、口論から殴り合いになり、サムソンの手とナイフの一撃を食らったロブロリ・ジャックは致命傷を負って倒れたというのである。

ヘブライ人の掟と同じくインディアンの間には目には目を、歯には歯を、命には命をという掟がある。スリム・サムソンの運命は決まっていた。翌日は死ぬ身であった。彼自身このことは他の者と同じようによくわかっていた。ロブロリ・ジャックが負った傷は生命にかかわるものであった。彼は既に事切れており、もし許可が下りればスリム・サムソンはH大佐の家にその晩は泊まり、翌日の明け方処刑のために出頭するよう当事者の間で取り決められていた。H大佐はこの犯罪者を自分の家に泊めてもよいとはっきり言ったが、同時に、今回の件では自分は全く責任がないとも答え、ライジング・スモークという名の老酋長に犯罪者の出頭に関して責任は負わないと断言した。

「あれ、逃げることない」どうでもいいといった風に相手は言った。

「しかし、あいつに見張りをつけてはならん。わしの家にあいつ以外の者を泊めるつもりはないぞ」

老酋長はスリム・サムソンは逃げたりはしないから安心していいと繰り返した。見張りをつけるつもりもなかった。騒動を起こさず指定された時間に処刑場に出頭すればいいということであった。

「あれ、死ぬ必要ある」ライジング・スモークは続けた、「あれ、掟知ってる。男としてあれ、やって来て、死ぬ。オウカティッビ、大きな心ある」老人が口にした言葉ひとつ一

つが私の胸にこたえた。

これほどインディアンの不撓不屈の精神を称える賛辞があるだろうか。この戦士が持つ絶対的服従の精神にこれほど信頼を置く言葉が他にあるだろうか。もう暫く話し合った後敵も味方も立ち去り、この不運な犯罪者だけが私たち二人のもとに残された。彼はまだ暖炉に腰をかけたままであった。身体の筋肉は落ち着き穏やかになっており、こわばったりはしていない。しかし頭はせわしく動いているようであった。一度か二度憂いに沈んだ捨て鉢な表情を浮かべて彼が頭を左右にゆっくり動かすのが私の目に入った。彼の一挙手一投足とその表情を私は最大限の関心を払いながら見守ったが、彼が犯した殺人について腹蔵なく彼と言葉を交わしているH大佐は当然私よりも深い気遣いを見せていた。はっきり言えばH大佐が口を挟んだが故にこの不運な事件が起きたのであった。いかにもこの紳士は今回の件に関して全く責任がなかったとは言え、思わず知らず自分が事件の引き金になったことに大佐が覚えた心の痛みは決して軽くなることはなかった。私たち白人の間の慣例的用法からすると最も適切だと断言してよい弔慰を表す言葉を使って大佐はインディアンと話した。もし今回の犯罪がお金で減刑にできるのであれば故人の友人や親戚を買収してみようと言った。可哀想な男はそれに深く感謝したが、同時にそれは無駄な努力だと答えた。部族がそのようなことをこれまで許したためしはなく、ロブロリ・ジャックの友人たちは彼の大敵であり、いかなる減刑にも同意することはないだろうと言った。

しかしH大佐はこれに納得せず、とにかくいちかばちかやってみる覚悟を決めた。この決心は他のインディアンたちが立ち去った後になって初めて彼の心に浮かんだものであっ

た。大佐はどこに行けば連中に会えるか一気に見当をつけると、私たちはすぐにリゴンの安酒屋に向かった。農園からせいぜい四分の一マイルしか離れていないところにそれはあった。そこに行ってみると、インディアンたちはほとんど全員が到底交渉などできない最悪の状態にあった。ほとんどがすっかり酩酊した状態にあった。殺害された男の死体はベランダに大の字に寝かせてあり、熊皮が体半分かぶせてある。胸は露出し、胸幅は広く丸々と太った男らしい胸をしているが、深い鋭い大傷を負っており、その周りを泡混じりの濃い血の塊が囲んでいた。連中の中で恐らく一番酩酊していたのは故人の近い親戚だった。悲しみ故に最も大きな慰めを得る権利が彼らにはあり、それがウィスキーという形を取ったのである。インディアンは放蕩を愛するものであり、私たちにはそれを堪能させる手段があるので、難なく彼らの復讐心を買収できるものと思い込んでしまったのだが、しかしまもなく私たちはひどい勘違いをしていることを思い知らされた。あらゆる努力もあらゆる申し出も無駄であった。万全の策も相手を納得させようと言い聞かせる努力もすべてが水泡に帰した後で、ライジング・スモークは私たち二人を脇へ引き寄せ、とても無理な話だと私たちに言った。

「オウカティッビ、死ぬ必要ある、話しても無駄。掟ある、オウカティッビ、ロブロリ・ジャック、このわしライジング・スモーク、それにみんなのため、掟皆同じ。オウカティッビ、明日死ぬ」

意気消沈したまま私たちは酒に酔って感傷的になっているこの哀れな連中のもとを離れた。戻ってみると、スリム・サムソンはトマホークの柄にナイフで懸命に何かを刻んでい

た。こうして出来上がったところに平らに延ばした銀を差し込んだが、それは以前同じような目的のために使用されたものらしかった。粗造りながら鳥の形をしており、大抵ライフルやショットガンの台じりの飾りとして用いられる安ぴかの装飾品のひとつだったのかもしれない。私はますます関心を寄せて彼の顔をみつめた。この顔を見る者は、状況を知らぬ者は、そこに何を見い出すことができたであろうか。先ほど起きたあの恐ろしい事件、そして彼をしっかりと待ち構えている恐ろしい運命のことなどそこには微塵もなかった。彼は私たちの任務にいささかの関心も見せなかった。彼の顔も態度もそれが無益であることを彼が確信していることを物語っており、事の次第を話しても彼は答えもせず顔を上げることもなかった。

このときの私と私の友人の思いを言葉にすることなどとてもできないだろう。今回の事件を考えれば考えるほど私たちの心は痛み気が滅入るばかりであった。私たちの思いにはほとんど戦慄と言ってもいい痛みが伴った。暖炉の火の側にインディアンを残したまま私たちはその場を離れた。私たちが部屋から引き揚げようとした矢先、彼は彼らの言葉で簡単な節付けの歌を小声で歌い始めた。それは彼の人生の主なる出来事を語るためのものであった。実はこの歌は死の歌であり、息子や親戚の名誉となるべき忘れてはならない行為を詳しく語った物語そのものであった。このようにして彼らの偉大なる人物の勇猛さと彼らの歴史上の主たる出来事は代々語り継がれていくのである。どうやら翌日に対する心の準備として記憶を呼び起こしているようであった。来世を受け入れるために自分の過去について綴った物語をしかるべき形で整理していたのである。

神命に従うこの行為の邪魔はしないと決めた私たちはそのまま部屋を出た。自分たちの部屋に着いたとき、既に片方のブーツを脱いでいたHが出し抜けに言った、「いいか、S、あいつをこんな風に死なせてはならん。あいつの命を救う努力を二人でやらねばならん。助けねば」

「どうなさるつもりですか」

「一緒に来てくれ。戻ってあいつに逃亡するように勧めるんじゃ。連中が酔っぱらっておれば逃げるのは簡単じゃ。逃がすためにわしの一番の馬をあいつにやろう」

私たちは例の部屋へ引き返した。

「スリム・サムソン」

「大佐！」落ち着いた答えが戻ってきた。

「このままここにじっとして銃殺になっては全くの無駄死にじゃ」

「駄目だ」という答えだけが返ってきたが、しかし相手に同意している口調であった。

「おまえが悪いんじゃない。ロブロリ・ジャックを殺すつもりなどおまえにはなかった。自分からやるつもりもなかったことが原因で命を捨てなくてはならないなんてあんまりじゃ。その若さで死ぬもんじゃない。これから先まだ何年もあるじゃろ。生きながらえるんじゃ、そしておまえのような息子を何人ももうけるんじゃ。この世には幸せはどっさりあるもんじゃ、どこに幸福を求めればいいかわかりさえすればな。しかし死んでしまったんでは自分にとっても友人や敵にも無用のものとなるだけじゃ。なぜおまえが死ななくてはならんのか、どうして銃殺されねばならんのか」

「えっ？」

「よく聞くんじゃ。おまえの仲間はリゴンで皆酔っぱらっておる。へべれけに酔っておる、泥酔しておる。目も見えず耳も聞こえない状態じゃ。朝までしらふに戻ることはない、恐らくそれまではな。おまえはミシシッピ川を越えたことがあるな。道はわかっているな」

答えは肯定的であった。

「多くのチョクトー族が、今ミシシッピ川の向こうで暮らしておる、あの赤い川の辺りと、それからずっと先の赤い丘の方にな。[24] 彼らのところへ行くんじゃ。おまえの手を取り、娘たちの一人をおまえの嫁にくれるはずじゃ。彼らはおまえを愛し、おまえを長にしてくれるはずじゃ。サムソン、急いで出かけるんじゃ、彼らのところへ逃げるんじゃ。おまえにわしの馬を一頭やろう。馬を使えば夜明け前には土地を通り抜けておる、白人に囲まれ、おまえの敵から遠ざかることができるはずじゃ。さあ出発するのんじゃ。おまえのような勇敢な男が殺されるなんて残念でならん」

これが私の友人の説教の骨子である。説得はあの手この手を使ってなされ、およそ人間の心に影響を与えると思われるあらゆる恐怖心、希望、情熱に訴えかけた。インディアンの心に強い葛藤が生じ、それが外に現れるのを完全に抑えることはできなかった。彼はさっと立ち上がると、せわしく室内を歩いたが、目は神経質に素早く動き、大きく見開いていており、感情の激しさをはっきりと物語っていた。Hが話し終えると彼は突然私たちの方を振り向き、大体次のような内容の言葉で答えた。

「俺は白人が好きだ、俺はいつも白人の友人だった。俺は白人の掟の方が部族のものよ

り好きだ。ロブロリ・ジャックが俺を笑ったのは、俺が白人が好きで、白人のように部族の者にやってほしいと願ったからだ。しかし俺はもう用なしだ。俺は白人を好きになることはもうできない。部族の者が俺に死ねと言っている。このまま生きていけるわけがない」

彼の答えの内容はこのようなものであった。その意味は単純明快であった。彼は私の友人が出した逃げて生きるという提案を利用したくないわけではなかったが、初めから疑問を抱くことなく崇敬してきた部族の掟に対して常日頃抱いている敬意をかなぐり捨てることはできなかった。慣習というものはすべての野蛮な民族の傲慢な暴君なのである。

この件に関して彼を勇気づけ一歩を踏み出させることが今やH大佐と私の共同目標であった。思いつく限りの論法を使って彼に高飛びすべきだと言い含めた。インディアンが白人を自分たちよりはるかに優れていると見ているという事実は私たちの目的に幾分好都合なことであった。スリム・サムソンには彼が既に一部採り入れていた白人の習慣に賛同する傾向があり、これが私たちには幸いした。文明の主たる要素の一つと考えられていること、つまりできるだけ命は大事にしなくてはならないとする義務について、彼のためを思って私たちはじっくりと話し、命を奪う刑罰から逃げることの道義を主張した。やっとの事で彼を納得させることができ、私たちは満足感を得た。私たちの議論と懇願に屈した彼は馬を受け取ると、馬はできるだけ早く返すと自分から約束した。ため息をつきながら彼はすぐさま出立する意志を表明したが、そのため息は彼が先ほど見せた感情の変化と信念の変節の最初の証拠のひとつであったのかもしれない。

「大佐、もう寝てくれ。あなたの馬は戻ってくる」こうして私たちは部屋を出たが、暫

くして彼が家を出ていくのが聞こえた。そのとき私たちは二人とも、他の事件ではとても経験することはなかったであろうような軽やかな気持ちになった。しかし私たちは眠れなかった。ほとんど夜が明けようとする頃にようやく不安に満ちた眠りに落ちた私はどうであったかと言えば、小競り合いをしているインディアンたちの姿が私の眼前を埋め尽くし、ロブロリ・ジャックの硬直した死体がはっきりと見え、スリム・サムソンが死刑に処せられるために立ち上がっていた。

第四章

H大佐も私もそれほど早い時間には起き出さなかった。目覚めたとき最初に私たちが思い感じたものは歓喜であった。同胞を、そして多くの点で大いに尊敬すべき人物に思える人間を屈辱的な死から救うことに手を貸すことができたことを私たちは心から喜んだ。敵が落胆することを考えると私たちの勝ち誇った気持ちは高潮するばかりであった。服を着ながら今回の事件について話を交わした私たちは心から大笑いした。窓から外を覗いたとき、家の前はインディアンで埋め尽くされていた。彼らは建物を囲むようにして座っている者もあれば、立ったままの者、歩き回っている者もある。スリム・サムソンを引き渡す時刻はとうに過ぎていたが、感情を顔に出してはいない。しかしながら、ほとんどの顔に彼らを支配する犯罪者への友情か敵意の感情を読み取ることができるような気がした。敵の顔には邪悪で燃えるような歓喜の表情が、楽しみを残酷にも待ち構えている様子がはっ

きり窺え、一方、彼の味方である男女の中には不安を押し殺し悲しみのために控えめにしている様子が一際目立っていた。

しかし私たちが階下に降りて彼らを出迎え、殺人者が主人の一番の馬で逃走したことを知らせたときの怒りの爆発は凄まじいものであった。ロブロリ・ジャックにべったりの一団から身の毛がよだつ叫び声が上がった。一方スリム・サムソンの友人や親戚たちは咄嗟に武器を掴むと防御態勢に入った。私たちは自分たちの仲裁と助言がどのような結果を招くかを予想もしていなかった。インディアン部族の間では犯罪者が逃走した場合その近親者が代わって苦しまねばならないことを私たちは知らず、いや思い出しもしなかった。死ぬ定めにある犠牲者が逃走を計ることはないだろうと前の晩に彼らが感じた確信の大きな拠り所が実はこれなのである。次第に雲行きが怪しくなってきた。弓はもう引き絞られ、トマホークは振り上げられていた。集団はとうに二つに分かれてしまっており、それぞれが自分の陣営に行き、それぞれが敵一人の前に整列した。女たちは素早く後ろに下がり、棒切れや柵の横棒を手当たり次第に掴んだ。一方十歳、十二歳の子供たちは絶えず甲高い声を上げては、タゲリや雀にしか効かないようなちっぽけな弓や吹き矢筒を振り回していた。政治的言い回しを使うなら、「重大な危機が間近に迫っていた」。両陣営の慎重な長や指導者たちは木々や家の後ろに身を隠し、インディアン特有の策略の手練手管をすべて使うつもりでいた。どう見ても不意の容赦ない衝突は避けられそうになかった。騒動が始まるやすぐにH大佐は武装した。家から出る前に私はピストルと猟刀でしっかりと身を固めていた。最悪の事態を懸念しながらも私たちは相対立する両陣営の間に仲裁人として立ち

はだかった。

私たちの仲裁が功を奏して彼らの衝突を食い止めるといったことなど十中八九ありえなかっただろう。私たちが間に入ったために喧嘩がひどくなるのが遅くなったことは確かだが、介入によって私たちにできると望めるものと言っても、戦闘部隊をもっと辺鄙な戦場へ強制移動させるのが関の山であっただろう。ところが私たちを驚かせ失望させる状況がこのとき生じ、争いをきっぱりと解決し、殴り合いに訴えることなく両陣営を和解させたのである。騒動が最高潮に達し、流血を防ぐ手立てはひとつもないと私たちがあきらめたとき、疾駆する馬の重い足音が森に聞こえ、次の瞬間H大佐の馬が泡を吹きながら姿を現した。馬にはスリム・サムソンが跨り、鞭を使いながら全速力で馬を走らせてくる。土地を囲っている塀を飛び越えた馬はインディアンの両陣営に挟まれるようにして止まったが、前脚も後ろ脚も震えていた。高潔な男の顔がすべてを語っていた。彼の民族には未知のものであった行動を取ったことで彼は良心に絶えず責めさいなまれていた。彼がやったことは代々受け継がれてきた考えからすれば臆病者のやることであり不名誉なことであった。それだけではなかった。彼は自分が逃走したことで仲間に襲いかかる重刑を忘れなかったのである。人生は楽しく、彼にとって非常に気持ちのいいものであった。彼の行く手には明るく長い未来があった。彼と彼の民族をさらによくしようとする立派な、そして他の者と比較して言えば高邁な目的を胸に抱いていた。文明の諸要素を部族の中に取り入れるために彼が自ら率先して慣習という暴君的なしきたりに抵抗する大一歩を踏み出したことは既にお伝えした通りである。しかし彼は彼の天才でもってしても打倒することなどできな

い主義信条から生起する良心の仮借に耐えきれなかった。逃走中の彼の脳裏に浮かんだ考えは屈辱的なものであったに違いない。しかし今彼の顔に窺えるのは誇りと喜びと、そして忍従することで最悪の事態に対して強靭な力を得た精神だけであった。ひたすら部族の命に服従してその場に残れば揺るがぬ道義心を見せつけることもできただろうが、しかし逃走を企てた後に馳せ戻ったことにより実際彼の道義心はさらに目を見張るような形ではっきりと示されたのであった。彼はこれを身にしみて感じているようであった。身ごなしひとつひとつをとってみても彼の心がそれを感じていることがわかった。馬から飛び降りた彼は、手の平で胸を叩きながらこう叫んだ、

「オウカティッビ、死ななくてはならないという長の声を聞いた。さあ、長、この通り、オウカティッビは戻ってきた」

両陣営から叫び声が上がった。争いの兆候は消えた。群衆の言葉はもはや脅しと暴力のそれではなかった。死刑囚のために敵対する必要はないということが了解された。H大佐と私は悔しい思いを抱くと同時にがっかりした。スリム・サムソンが戻ってきたことによって十人以上の者が犠牲になったかもしれない死闘が阻止できたのは誰の目にも明らかであったが、それでも私たちは残念に思わざるを得なかった。この人物の生命は彼の部族の誰であれその百人分の生命と同じ価値があるように思われたのだ。

彼ほど飾らず気品に溢れた者はなかった。たちまち友人や親戚に取り囲まれた。死刑執行人が選出される予定の敵の一団は少し離れたところに陣取り、忍耐を絵に描いたような顔でそれを見つめている。事を早く進めたいという気持ちを彼らは気振りにも見せなかっ

た。敵と見る相手の血を流すのが差し迫ったことで小躍りしてはいても、威厳のある落ち着きと忍耐がその場を制している。歓喜の色はどこにも見えない。一方死刑囚と二人の他のインディアンとの間で小さな穏やかな声で話が交わされているが、身体の動きは全くない。一人は犯罪者の哀れな母親で、もう一人は彼の叔父であった。二人とも自分から話すというよりは彼の話に耳を傾けているように見える。会話は彼らの言葉で行われていた。暫くして話が終わると、彼は敵も味方もはっきりとわかるというより何となく感じ取ることができるような合図を送った。皆すかさず事の次第を理解した。それは最終的な処置に対して覚悟を決めたという合図であった。彼が立ち上がると皆が彼を取り囲んだ。老女の呻き声が、母親のそれが今はっきりと聞き取れ、叔父が彼女を他の女性群のところへ連れていった。叔父はそれから死刑囚のところへ戻り、その脇に陣取った。H大佐と私も彼の側へ近寄った。私たちを見ると、オウカティッビは微笑みを浮かべてただ次のように言っただけであった。

「ああ、大佐、やはりインジャンは白人のように強くはない」

H大佐は感情を込めて答えた。

「サムソン、お前を助けたかった」

「オウカティッビ、死ぬ必要ある」有徳の士は再び微笑んで答えたが、しかしそれはひどく哀れな笑いだった。

彼の堅い信念が揺らぐことはなかった。行列が出来上がり、肩にライフルを目立つようにして担いだ頑強な男が三人、行列の露払いになった。死刑執行人に指名された者たちで、

殺された男の近親者ばかりであった。顔には慈悲心のかけらもない。オウカティッビが三人のすぐ後に続いた。私たちが処刑場まで一緒に行くのを知って彼は喜んでいる風であった。成育不全の松の木の長い並木道を通り抜けると、両脇の高くなった丘に挟まれたところまでやってきた。そこは広々としていて周りを美しく彩られた渓谷であった。このように先へ進みながらも、次第に近づく一場面の主人公を演じることになる人物の身体から私の視線はほとんど離れることはなかった。目の前に立ちはだかる運命を前にして、これほどしっかりとした足取りで、これほどしっかり顔を上げ、重々しいがしかし人を引きつけるような冷静な表情をして、これほど穏やかに平然と進んでいく人物を私は未だかつて見たことがなかった。それでいて、これと同じような状況下で英雄ぶりを人に見せつけようとする大抵の白人男性によく見受けられるあの努力の痕は彼の振る舞いには微塵もなかった。さながら勝利に向かうかのようにして歩いて行くのだが、しかしその歩みは落ち着いており、沈着で動じない威厳があって、その頬には興奮の紅潮は全く見られない。目には激しく興奮した好奇心、つまり死刑執行人の姿を探し求めさせ死に伴う悲しみ一式から目を反らすことなどさせないあの好奇心は全くなかった。不可避の死を意識し、不可避であればこそそれに相応しい無関心さでもって運命に従う覚悟を決めた剛の者の顔に似ていた。

私たちの眼前に墓があった。その日曙光がさし始めるとすぐに準備されたものに違いなかった。墓から三十歩のところまでやってくると死刑執行人たちは足を止めた。しかし死刑囚はなおも歩を進め、あんぐり口を開けた墓の端のところでようやく足を止めた。慄然とさせる最後の試練のときが間近に迫っていた。人生の幕が降ろされ、人生という舞台が、

希望と将来と素晴らしい喜びを持つ舞台が、インディアンの目にすら金色に見える喜びを持った舞台が、永遠に幕を閉じようとしていた。私は苦しく呆然とさせるような悪寒が全身に走るのを覚えたが、彼に変化の兆候は全く見えなかった。ここで彼は友人たちを招き寄せた。敵も近寄り、遠巻きに見つめた。彼は死の歌を、つまり彼の偉業と彼の目的と彼の生きた体験を綴った物語を始めようとしていた。ゆっくりと荘厳で穏やかな低い声で歌い始めたが、歌詞は単音節の語だけを並べているようだった。先へ進むにつれその目は輝き、その腕はまっすぐ伸びた。身ごなしには熱が入り、語り口は速くなり一段と熱を帯びた。彼が口にする言葉は私にはひとつも理解できなかったが、言葉の律動は真実のものであり深い意味が満ち満ちていた。声の抑揚は律動を生み出す音の連結としっかり釣り合い、学校雄弁法を教えるヨーロッパの教師のお手本と言ってもよかっただろう。身ごなしは疾風の力に屈しつつも再び起き上がる巨木の動きに似て優雅であった。私はこのとき頭では理解できずにいながらその能弁に打たれていた。彼の口調と仕草から、彼の口の筋肉の動きと大きく見開いた目から、彼の物語が語る剛勇や徳行の具体例を見て取ることができるような感じがした。物語が終わりに近づいたとき、その一部が私にははっきりと理解できたという確信があった。彼が殺した男との不幸な口論について語っているのは明らかであった。頭を垂れた彼の目の輝きは消え、両手は心臓の上で組み合わされ、声はかすれしゃがれ声になっていった。それから逃亡の話が続いた。彼の視線はH大佐と私に向けられ、話が終わると彼は私たち二人に片手を差し伸べた。私たちはしっかりとそれを握ったが、そのときの思いを今ここで言葉にするつもりはない。彼はここで一息入れた。悲劇的結末

が目の前に押し迫っていた。彼が後ろに下がり墓のちょうど端のところに立つのが見えた。それから彼は自分の胸を、ヘラクレスのような人間に十分似合いそうな幅広の男らしい筋骨逞しい胸をパッとはだけると、心臓の上のところを片手で叩き、そこに片手を置いたままもう一方の手を自分の頭上に上げた。これが合図であった。奇妙な胸のむかつきを覚えた私は目をそらした。そのまま見続けることなどとてもできなかった。次の瞬間三丁のライフルが一斉に銃声を発するのが聞こえた。私が再び目を向けたとき、しかるべき状況に置かれておれば彼の民族にとって父のような存在となっていたかもしれない人物の高貴な遺骸の上に皆がスコップで新しい土をかぶせていた。

訳注

1 シムズは一八二四年の終わりか一八二五年の初め頃にミシシッピ州の父親の農園を訪ねている。

2 『ハムレット』第一幕第二場第一六九行から。因みにシムズは "truant" ではなく "errant" を使っているが、シムズのロマンス『ヘレン・ホールズイ』第一章には『ハムレット』と全く同じ表現がある。

3 マスコーギアン語族。もとはミシシッピ州南部と中央部にいたが、一八三〇年から一八三一年にインディアン特別保護区（現在のオクラホマ州）に移る。

4 アラバマ州モビールでメキシコ湾に注ぎ込んでいる川で、ミシシッピ州とアラバマ州の州境の近くを流れている。

5 アンドルー・ジャクソン（1767-1845）。アメリカ合衆国第七代大統領。

6 ルイジアナ州南東部、ニューオーリンズ北方にあるメキシコ湾の入り江。

7 トーマス・グレイの詩「長い物語」（1750）の第二スタンザに、「光を閉め出す華美な（ステンドグラスの）窓の数々／どこに通じるのかわからぬ多くの通路」とある。

8 アライグマのようなやり方でゆっくりとぎこちなくフェンスや棒、丸太などの上を進むこと。

9 大佐は南部・中部の州で軍と関係のない名誉職などに対する敬称。

10 フィリップ・フレノー（1752-1832）。H大佐が言及しているのはフレノーの詩「インデ

ィアンの学生、もしくは自然の力」（1787）。

11 トーマス・キャンベルの詩「ロチエルの警告」（1802）に「もぎ取られ血を流す肢のように／見捨てられ、追放されて、大洋の大波に跨るというのか」とある。

12 「出エジプト記」二十章五―六を参照。

13 メイン州南岸の小島の散在する湾。

14 ノースカロライナ州中部沖の、パムリコ湾と大西洋の間にできた鎖状に連なる砂質の島々のひとつ。

15 アンカイシーズとヴィーナスの子供。トロイ戦争におけるトロイ側の勇士でローマの建設者。

16 オートミールや澱粉を水又は牛乳でどろどろに煮た粥。

17 一五二一年スペイン人ヘルナン・コルテスに征服されるまで、十二世紀頃からメキシコ中央部に高文明を築いていたアステカ王国の皇帝で、モンテスマ一世（1440-1469）、モ

ンテスマ二世（1502-1520）。モクテスマとも。

18 フレノーの詩「インディアンの学生」の第一スタンザに「野蛮な部族が獲物を追いかける／サスケハナの最も山奥にある源流から／外衣を黄色い紐で結んだ／森の羊飼いがやってきた」とある。因みにサスケハナはニューヨーク州中部から南流してチェサピーク湾に注ぐ川の名。

19 ローレンス・スターン（1713-68）の『トリストラム・シャンディ』（1759-67）第二巻十七章を参照。トリム伍長がオランダの数学者ステヴィナスの書物の中に偶然見つけた説教を朗読するとき、異端審問所について書かれた箇所、「そこに見られるものは『宗教』が、『慈悲』と『正義』とを脚下の鎖に繋いで、―拷問台その他の責め道具にささえられつつ、不吉の判官席に物凄い形相で座っている姿だ。ああ、聞こえる、聞こえる！何といたましい呻き声だ！」（朱牟田夏雄訳、筑摩書房、昭和四一年）を読みながら、審問所の牢獄にいる兄のトムを気遣う場面がある。

20 ローマの建設者で初代の王。三十三年間の支配の後、閲兵中に突然大雷雨が起こり、その間に王の姿は見えなくなったとされているが、王は貴族たちによって暗殺されたという説もある。

21 「マタイによる福音書」十三章四節、「ルカによる福音書」八章五節を参照。

22 サムソンは怪力・豪勇のイスラエルの士師に由来する。愛人デリラの裏切りでペリシテ人に捕らわれ、盲目にされた。「士師記」十三―十六を参照。

23 「田舎者」「船乗りの食べるオートミール」などの意味を持つ。

24 「涙の道」を生き延びたチョクトー族は、ニューメキシコ州東部からテキサス、ルイジアナ州に流れるレッド・リバー沿いの土地を開拓し、一八三四年そこに独自の憲法にづいた共和国を再建した。